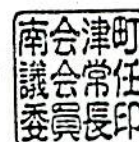




議 委 第 7 6 号
平成 25 年 11 月 29 日

南会津町議会議長 芳賀沼 順一 様

産業建設委員長 湯田 哲



委員会調査（行政視察）報告書

本委員会の所管事務調査について、調査の結果を別紙のとおり、会議規則第77条の規定により報告します。

- 1 調査事件
 - ①特徴的な農業関係事業などの取組みと今後の展望
 - ②農業以外の地域活性化、地域づくりの取組み
- 2 調査の経過
 - ・平成25年10月31日(木)から11月1日(金)まで
 - ・長野県南佐久郡川上村
 - ・10月31日(木)午後1時30分から 3時20分
 - ・応対者：川上村副町長 川上 芳夫
産業建設課農政兼林務係長 井出 智博
総務課総務係 川上 高太
 - ・町内施設調査：到着と同時に全村が標高1100m以上にある見渡すかぎりのレタス畑立派な村の文化センターなどを見学
 - ・参加者：湯田 哲・山内 政・渡部 忠雄・高野 精一・楠 正次
議会事務局 鈴木 雄蔵
- 3 調査結果
 - (1) 調査の概要(視察では、川上芳夫副村長が、私たちの質問に答えてくれました)

川上村は、長野県の東南端に位置し、千曲川源流に広がる水も空気も清らかな高原野菜の名産地、全村が標高1100m以上の高所にあり、日本一の生産高を誇る夏レタスをはじめ、冷涼な気候を生かした多彩な高原野菜を栽培しています。位置的に群馬・埼玉・山梨に接しているため、全国への流通にも便利で、生産から流通に至る一貫した品質管理体制のもと、旬を迎えた新鮮で美味しい野菜をとれたての鮮度を保ったまま出荷できるという恵まれた条件の中で農業が営まれています。人口約4200人農家戸数160戸程度で年間売上は160億円を超えており、全国でも注目を集めている。
 - ① 農業の歴史は長い間、自給目的の主穀栽培の農業から江戸末期に、水稻栽培が可能となり水田面積が増加した。明治初期には、カラマツの育苗が行われ、県内・東北・北海道をはじめ韓国・満州・ヨーロッパまで販路を広げた。昭和9年に出荷用の白菜栽培が始まった。昭和25年に試作導入され、昭和41年に夏白菜が野菜定産地、昭和44年には夏秋レタスが野菜指定産地となり、昭和53年レタスの栽培面積が1000ヘクタールを超える。また、平成18年に台湾へ、平成20年には香港へレタスの輸出を開始している。現在、水田面積はゼロである。
 - ② 鹿による農作物への食害が大きな問題になったが、平成21年から22年にかけて鳥獣害防護柵であるワイヤーメッシュを全村総延長150キロメートルに設置、これによって被害はほとんど無くなった。
 - ③ 野菜栽培に重要である灌水装置「畑かん」を、これまで計画的に整備し、現在では、全域で「畑かん」が設置され広大な面積での野菜栽培を可能としている。
 - ④ 栽培のための労働力は、国内の多くの大学生などアルバイトなどであった時代があったが(当時はその食事など、受け入れ農家の奥さんなどが作り、宿泊もその農家であった。それが大変だったという)、現在では海外からの研修制度による中国、フィリピン、ベトナムから850人もの労働力としてこの人口4200人の川上村にやってくるのには驚いた。(その人たちの滞在は、自炊しているという。)
 - ⑤ 後継者については、村で特に対策しなくとも農家ごと後継者ができているという。後継者の平均年齢は29歳、うらやましい限りである。

- ⑥ 農作業を終えた冬の期間、文化センターには20以上もカルチャー教室があり主婦など多くの地域の人たちが参加しているとのこと。

(2) 所 見

川上村を視察し感じたこと、それは全国一の産地となる絶好の条件がそろっていたことにある。他には真似のできない1000mを超える高原にあること、そして何よりも高速道が川上村の横を通り、近県へも首都圏へも短時間での交通網があることである。出荷にあたり、それは野菜を収穫しそのままの鮮度で消費者に届けることを可能としている。

この条件を本町に当てはめると、鎭岩の高杖高原がある。交通に関しては、川上村の3倍の3時間以上もかかるとはいえ、物が翌日の朝には、市場に届く今の時代には、同じである。本町の農業で、高原野菜を導入し川上村のような産地になることは可能なかもしれないが、本町には、すでに南郷トマト、アスパラ、赤カブなどの野菜や、広い面積で栽培されている南会津産米があることを改めて誇りに思えた。

現在、アスパラの茎枯病、赤かぶの根こぶ病など大きな問題となっている。川上村でもこの日本一の産地になるまでに多くの困難を超えてきた歴史を聞くことができたことで、本町でもハウスによる雨よけ茎枯病対策や、畑の土壌調査によるpH（ペーハー酸度）の違いによる赤かぶの根こぶ病対策などを実施しているが、さらなる町と県の農業研究機関との情報交換や技術的協力によって、一日も早く対策技術の確立することを強く期待したい。この研修によって、さらにその思いは強くなった。

川上村の高原野菜の売上は160億円、本町の南郷トマト売上は10億円、比べることはできないが、その美味しさや「南郷トマト」というブランド力は、全国的にも有名であり、大きな共通点がある。

トマト栽培の新規就農者、後継者問題、栽培面積の拡大などは、一戸のトマト農家の栽培面積を拡大することは、労働力無くしてできません。川上村のような海外から労働力が拡充は無理としても、町内での労働力の確保も行政や農協のサポートによって可能なかもしれません。多くのヒントのようなものが川上村の視察であったと思います。

(3) 総 括

1000mを超える高原、広々と遠くまで続く野菜畑の美しい風景、農家には何千万円もする大型トラクターが何台も並ぶ、交通網は、高速道路も近くにあり、東京、群馬、埼玉、山梨などがすぐ目の前にある。その小さな村に毎年850人もの海外からの労働力。村の農業売上は160億円を超える。農家前の外車が、その農家の生活ぶりや所得を想像させる。

川上村の農業がそのまま本町の農業に応用できるものではないが、この視察によって本町の農業施策への多くのことを学ぶことができました。本町の農業の素晴らしさを再確認できた視察となりました。それは川上村の農業の歴史が、まさに本町の南郷トマトの歴史と共通していたことである。長いその歴史によって、「南郷トマト」の全国的に有名な現在の地位を確立していることを再確認することができました。

全国に誇れる南郷トマト、アスパラ、赤かぶなどのさらなる栽培者、栽培面積、生産量増加のためにも、生産者に寄り添ったさらなる本町の農業政策を進めることの重要性を実感した。